



平成30年11月9日

坂戸市議会議長 様

会派名 さかど新政会

代表者名 飯田 恵



実施報告書

下記のとおり、調査研究等を実施したので報告します。

記

1 期 日 平成30年10月10日(水)～平成30年10月12日(金)

2 参加者氏名

飯田 恵	猪俣 直行		

3 調査研究等の行き先及び内容

行き先	内 容
新潟県長岡市 (シティーホールプラザ 7オ-レ長岡)	・第80回全国都市問題会議 ＝市民協働による公共の拠点づくり＝

4 概要

別添のとおり

第80回全国都市問題会議調査結果報告

1. 日 時 平成30年10月11日(木)・12日(金)
2. 行 先 長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡
3. 内 容 テーマ：市民協働による公共の拠点づくり
4. 主 催 等 主催 全国市長会
公益財団法人 後藤・安田記念東京都市研究所
公益財団法人 日本都市センター
長岡市
協賛 公益財団法人 全国市長会館
5. 全国都市問題会議の概要
基調講演・主報告・一般報告・パネルディスカッション

概要説明は次のとおりである。

(1) 第1日目 10月11日(木)

- 開会式 開会挨拶 全国市長会会長 相馬市長 立谷 秀清 氏
開催市市長挨拶 新潟県長岡市長 磯田 達伸 氏
来賓祝辞 新潟県知事代理(都市局長) 永田 雅一 氏

・基調講演

「地方分権へのまなざし」

東京大学史料編纂所教授 本 郷 和 人 氏

・主報告

「長岡市の市民協働」

新潟県長岡市長 磯 田 達 伸 氏

・一般報告

「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」

三重県津市長 前 葉 泰 幸 氏

・一般報告

「場所の時代」

建築家・東京大学教授 隈 研 吾 氏

アオーレ長岡の発注者として

筑波大学客員教授 森 民 夫 氏

アオーレ長岡での市民協働の実践

アートディレクター 森 本 千 絵 氏

(2) 第2日目 10月12日(金)

・パネルディスカッション

【テーマ】

市民協働による公共の拠点づくり

【コーディネーター】

明治大学政治経済学部地域行政学科長・教授 牛山 久仁彦氏

【パネリスト】

東京理科大学理工学部建築学科教授 伊藤 香織氏

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 奥山 千鶴子氏

長岡市国際交流センター「地域広場」センター長 羽賀 友信氏

埼玉県和光市長 松本 武洋氏

高知県須崎市長 楠瀬 耕作氏

●閉会式

次期開催市市長挨拶 鹿児島県霧島市長 中重 真一氏

閉会挨拶 日本都市センター理事 三鷹市長 清原 慶子氏

(3) テーマのキーワード

かつて我が国は各地に存在した共同体で、住民同士が協力して地域の課題に取り組んでいた。

その後、社会の変化に伴い、共同体は弱体化していったが、その一方で、

近年、市民の能力や自己実現に対する意欲を背景に市民活動が活発化している。

市民は、自発的かつ能動的に手を携えて地域社会の課題に取り組むようになった。

今年開府 400 年を迎える長岡市は「米百俵」で代表される、いわば「市民協働」の先駆けとも言える精神が根付いている土地である。

また、長岡藩の頃から、領主領民が一体となって「士民協働」によって藩を盛り立てて来た。

身分制度が厳しい江戸時代の社会の中で、侍と庶民が長岡藩内で一緒に祭りを楽しんでいたと言われる。

又、北越戊辰戦争後の閉塞感の中、長岡藩大参事・三島億二郎が「ランプ会」を発足し、士族や町人の垣根を超え、復興策や新時代の商工業などあらゆる話が話し合われ、今ある長岡の礎を築いたと言われている。

自治体が一方的に公共の拠点を整備するだけでは、市民の多様なニーズに応えることができず、市民活動や協働の充実につながらない。

公共の拠点づくり自体、市民と行政との協働により進めていく必要があろう。

今回の会議では、市民協働による公共の拠点づくりについて、各地の事例を紹介しながら考察し、議論をしたい。

6. 感想・所見

開会式では、開催市の長岡市長より今回のテーマ「市民協働による公共の拠点づくり」で、長岡市が今まで進めてきた政策をテーマに合わせた話があった。

基調講演は東京大学の本郷和人教授から地方分権へのまなざしと題して今後ますます進む地方の人口減少に対して、どのように未来図を描けるかがとても重要であり、日本の歴史を概括的に振り返り、もともと日本が分権型社会として発展し、特に黒船来航により、諸外国と渡り合うために明治維新後に中央集権型の国家づくりが強まっていったこと、現代の黒船は、人口減少社会であり、それを乗り越えるには、分権型の国づくりがカギになる、という文脈で、地方分権の意義を強調される講義があった。

その後、開催市の長岡市、磯田市長からの主報告では、長岡市の市民協働の取り組みが報告された。

今回の会場になっているアオーレ長岡という施設の意義や活用方法などの話があった。

ショッピングモールなどお金が動く施設ではなく、市民が集まり情報がトレードされる施設であり、これからの時代には必ず必要とされるものであるとの話が印象的で、本市においては、新しい施設を作るというのは非常に難しいので、すでにあるものを作り直していくという上では『市民が集まり、情報が交換される施設』という視点からは参考になった。

午後からは、津市、前葉市長より「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」の話を伺い、市民の声を聞くことの重要性をとことん重視しながらも、全体の情報を一番知っているのは行政であり、八方美人の案は出せないが、責任を持って答えていくという姿勢に、強い信念を感じた。

その後、このアオーレ長岡を設計された建築家、隈研吾教授と発案者である前長岡市長、森民夫教授とアオーレ長岡をアピールするアートディレクター、森本千絵氏の報告があった。

隈教授は2020年の東京オリンピック・パラリンピックのメインスタジアムを手掛けている建築家であり、森本氏は朝ドラの「半分、青い」のメインポスターを手掛けたり、テレビでも様々なCMを制作している、日本の先端で活躍されている2人で、話はとてもスケールが大きく考え方に、「気配り」「思いやり」がこもっていて心に響くものがあった。

二日目は、「市民協働による公共の拠点づくり」をテーマに牛山教授コーディネーターのもと、パネルディスカッションが開かれた。

伊藤氏からは、シビックプライド醸成のコミュニケーションポイントから考える「拠点」と題して、話があった。

奥山氏は、子育てひろばの普及・啓発、及び子育てひろばに関わるスタッフ研修の必要性を感じ、実践者をサポートする中間支援団体「子育てひろば全国連絡会協議会」を設立され、全国の子育て支援団体との交流を深め、子育ての環境づくりに尽力されている。

奥山氏からは、子育て支援から見た公共の拠点づくりと題して、話があった。

羽賀氏は、長岡市国際交流センター「地球広場」センター長で、国際協力プロジェクトに関わったのをはじめとして、帰国後は多様性を生かした地域づくり・人づくりに携わり、協働による地域力を世界に向け発信している。

羽賀氏からは、長岡の市民主体のまちづくりと題して、話があった。

埼玉県和光市長の松本武洋氏。松本氏は、「夢と希望が持てるまち、もっと元気な和光市の実現」を公約の柱に掲げ、「住んでよかった」と実感できる行政サービスを提供し続け、未来を生きる世代にとって魅力あるまちづくりを進めている。

松本氏からは、地域包括ケアを支える新たな拠点づくりと題して、話があった。

高知県須崎市長の楠瀬耕作氏。楠瀬氏は、全国平均より早く進んでいる過疎・高齢化・人口減少、改善道半ばの財政状況等に鑑み、新しい価値や地域の元気を創造して次世代につなげる地域づくり「持続可能なすきづくり」を進めている。

楠瀬氏からは、人・モノ・金の好循環を目指してと題して、話があった。その中で、伊藤香織教授の市民一人ひとりが

「自分の創造性がまちに影響を与えられるという実感を持てることが大事」

「自分の毎日の生活と市政が繋がっているという実感を持てることが大事」

「理解するだけではなく、活動するようになることが大事」

「他者の考えを知り、意見交換出来ることが大事」

という話は、「市民と行政の協働」をテーマに市政運営を進めて行く上でとても大事なことと思った。



様式第 2 号

平成 30 年 11 月 16 日

坂戸市議会議長 様

会 派 名 さかど新政会
代表者名 飯田 恵



実 施 報 告 書

下記のとおり、調査研究等を実施したので報告します。

記

- 1 期 日 平成 30 年 10 月 17 日 (水) 午後 1 時 30 分～3 時 30 分
- 2 参加者氏名

飯田 恵	猪俣直行		

- 3 調査研究等の行き先及び内容

行き先	内 容
坂戸市役所 全員協議会室	坂戸市議会議員研修会 「超高齢化・高度情報化社会における読書や読み書き 困難者への情報支援について」

- 4 概要
別添のとおり

坂戸市議会議員研修会結果報告

- 1 日 時 平成30年10月17日(水) 午後1時30分～3時30分
- 2 行 先 坂戸市役所全員協議会室
- 3 内 容 「超高齢化・高度情報化社会における読書や読み書き困難者への情報支援について」

4 内容についての概要

前記内容について、NPO法人 大活字文化普及協会 田中 章治先生 市橋正光先生をお招きし、概要説明を聴取した。(盲導犬 ニコラス同伴)
説明は次のとおりである。

(1) 「読むこと・生きること・情報は命～読み書き(代読・代筆)サービスの必要性～」

- ・まず田中先生ご自身が自己紹介をされた。
次に障害者権利条約について触れられ、第2条の定義に記されている「手話も言語であり、障害に基づくあらゆる区別、排除または制限をせず、合理的配慮を否定しない」について話された。
<合理的配慮>とは、障害のある人とない人の平等な機会を確保するために、障害の状態や性別、年齢などを考慮した変更や調整・サービスの提供をすることで、それをしないと差別になる。
- ・読み書き情報支援サービスの現状
障害者にとって「読み書きすること」は「生きること」であり、社会参加には不可欠であるが、官公庁・公的機関・民間企業等の情報提供の責任はというと、まだまだ十分に果たされているとはいえない。
「障害者総合支援法」における地域生活支援事業の中の「意志疎通支援事業」として地域の公共図書館における読み書きサービスの実践がある。
- ・視覚障害の3つの不自由
①歩行(移動) ②読み書き ③職業選択 がある。
そのため視覚障害者に対しては、常に声をかけて欲しい。その際には、代名詞や指示語などは使用せずに、手に触れさせることにより、さらに形状が分かりやすくなるので配慮頂きたい。
- ・「すべての人が読書、読み書きできる社会作り」を目指して、国や地方公共団体、読書や読み書きに関わる個人や団体、事業者、国民の「読書権」の保障の確立のため、協力と連携、そして積極的な実施を働きかけ、アピールしていく。「読書権保障を実現する政策を考える会」は、政策、立案及びその実現に向け、点字・音声・大活字の媒体が必要と考え、そのためのノウハウを勉強する研究会である。

- ・拡大文字、大活字の必要性

弱視者、低視力者、高齢者により快適に読書を楽しんでもらうため。

文字が大きいだけでなく、反転版といい黒バックに白文字印刷がよりわかりやすくはっきりする。

(2) 体験

- ・全議員がアイマスクを着用して、代読者による手紙や会報誌の朗読を聞き、視覚障害者の疑似体験を行った。

5 感想・所見

目が見え、物を見る、文字を読むことは当然のことで、不自由を感じたことはほとんどない。しかし、田中先生のように視覚障害者の方々は、「ロービジョン」が日常的である。

日本においては超高齢社会の進行に伴い、老眼に限らず高齢からの視覚障害者も増えてきているので、やはり生活には視覚補助具の使用が不可欠である。

「拡大文字版」「大活字版」の書籍を実際に手にとって見た。また先生のお話によると、ゴシック体やハイコントラスト、さらには白黒反転などは視認性が高く、その有効性も広く認められてきており、それら補助具の開発も進められているとのことである。

今回アイマスクを着用しての体験は、一時的ではあったが視覚障害者の方と同じ気持ちになることが出来有意義であった。

バリアフリーの観点から、障害者に対してだけでなく、相手の立場にたった働きかけをしていくことが重要であると痛感した。



様式第2号

平成30年12月11日

坂戸市議会議長 様

会派名 さかど新政会

代表者名 飯田 恵



実施報告書

下記のとおり、調査研究等を実施したので報告します。

記

1 期 日 平成30年11月14日(水)～平成30年11月15日(木)

2 参加者氏名

飯田 恵	猪俣 直行		

3 調査研究等の行き先及び内容

行き先	内 容
栃木県宇都宮市 (宇都宮市文化会館)	・第13回全国市議会議長会 研究フォーラム in 宇都宮

4 概要

別添のとおり

『第13回全国市議会議長会研究フォーラム in 宇都宮』結果報告

(記録者：飯田恵)

1. 期 日 平成30年11月14日(水)・15日(木)

2. 参加議員 飯田恵、猪俣直行

3. 開 場 宇都宮市文化会館

4. 日 程

・第1日 11月14日(水)

13:00 開会式

13:20 <第1部>基調講演

「地域共生社会」をどうつくるか

2040年を越える自治体のかたち

宮本 太郎(中央大学法学部教授)

14:20 休憩

14:40 <第2部>パネルディスカッション

「議会と住民の関係について」

コーディネーター 江藤 俊昭(山梨学院大学大学院研究科長・法学部教授)

パネリスト 今井 照((公財)地方自治総合研究所主任研究員)

本田 節(有限会社 ひまわり亭代表取締役)

神田 誠司(朝日新聞大阪本社地域報道部記者)

小林 紀夫(宇都宮市議会議長)

16:40 次期開催地挨拶 (高知市議会議長)

16:50 終了

17:30 <第3部>意見交換会 (*希望者のみのため参加せず)

・第2日 11月15日(木)

9:00 <第4部>課題討議

「議会と住民の関係について」

コーディネーター 江藤 俊昭(山梨学院大学大学院研究科長・法学部教授)

事例報告者 桑田 鉄男(久慈市議会副議長)

伊藤 健太郎(新潟市議員・新潟市議会主催者

教育推進プロジェクトチームリーダー)

ビアンキ アンソニー(犬山市議会議長)

道法 知江(竹原市議会議長)

11:00 閉会式

11:30 視察 (*希望者のみのため参加せず)

5. 会議内容

この研究フォーラムは、全国の市議会議員が一堂に会し、さらなる地方議会の権能強化を目指し、共通する課題や今後の議会のあり方について意見交換を行うとともに、議員同士の一層の連携を深めることを目的とし、毎年行われている。

今回は栃木県宇都宮市で開催され、「議会と住民の関係」をテーマとし、平成31年に実施される統一地方選挙(本市はこの翌年になるが)を控え、人々の社会と生活が大きく変化する時代において、地方自治の根幹をなす議会が住民とどのように関わり、どうすれば住民の議会に対する関心を高めることができるかを研究することを目的に開催された。

1日目の開会式では、山田一仁会長(札幌市議会議長)から「今回のフォーラムでは「議会と住民の関係」をテーマに、各分野における専門家、識者の方々と議員の皆様方と広く討議し、これを契機に全国の市区議会の一層の充実強化が図られ、今後の活動の一助となることを祈念する」との挨拶で始まり、続いて、開催地である小林紀夫宇都宮市議会議長が挨拶した。

基調講演では、宮本太郎中央大学法学部教授が「地域共生社会」をどうつくるかと題し講演した。

内容は、自治体が直面する2040年問題は、日本人の半数が107歳まで生きる時代になると予測されるなか、定年はターニングポイント、さらには中継点となる。「支える」「支えられる」の二分法では「重量挙げ」社会になり、人口減少による「漏斗化」する日本が限界点になるということだ。

ピンチをチャンスに、チャンスを実現にする自治体が求められる。これからの地域づくりの新しい目標は、制度・分野ごとの縦割りや支え手、受け手という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体を我が事として参画し、地域をともに創っていく社会を目指すことである。

定年後男性の地域デビュー支援をすることにより、ご当地を「生涯活躍のまち」「誰もが人材のまち」「ずっと出番のあるまち」「必要縁でつながるまち」のチャンスに繋げていく。

チャンスを現実化するために政治の役割は大きいと話され、講演を閉じた。

次のパネルディスカッションでは「議会と住民の関係について」をテーマに、信頼され魅力ある議会の創造のために、住民の信頼を勝ち取る手法、議会側からの魅力向上、発信の手法、提言などについて議論した。

終了後に、次期開催地となる高知市の紹介映像がステージで流れる中、高知市議会議員が坂本竜馬のいでたちで登壇し、高知市議会議長が挨拶を述べた。

2日目も「議会と住民の関係について」のテーマで課題討議を行った。

コーディネーターは、1日目と同じ江藤俊昭山梨学院大学大学院研究科長・法学部教授により進められていった。小気味よい軽快なテンポで各報告者からの意見を聞いていった。

特に印象深かったのは犬山市議会議長のビアンキ・アンソニー氏の議会改革のスピーチであった。

彼はニューヨーク出身、犬山市立中学の英語講師になり、日本国籍を取得。2003年に初当選。アメリカの地方議会でも議場で市民が発言するのは普通のことであるため、市民が市民を代表する議員全体に意見を言う権利があるのは当然と考え、市民が議場で発言できる「市民フリースピーチ制度」を始めた。

生粋のニューヨーカーである彼が、禅や武道の国にあこがれて来日し、日本とニューヨーク市民との国際交友や国際化推進に尽力されたことは、大変に素晴らしいと感じた。ユーモアたっぷりで日本人以上に日本のこころをスピーチされ、とても興味深く聞かせていただいた。

それぞれの立場から白熱した討論が交わされ閉幕した。

6. 考 察

充実しあつという間の2日間であった。執行権、執行部優位の二元代表制の中で、議会の役割を明示することはとても難しいと改めて感じた。

議会は自治体の機関であり、その役割を議員全員で共有認識して予算、決算、それ以外の意思決定も、議会の議決を要する場合も、議決しない限り実行できない。そのことを住民に伝えていくことの難しさも考えさせられた。

市民にとって議会、議場は遠い存在になっているのかもしれない。ビアンキ・アンソニー氏の提案された市民が議場で発言するという議会改革には驚かされた。「市民参加」の機会と形を増やし意見聴取し、議会として提言していき問題解決の糸口としていく効果をあげていることに、感銘を受けた。

また、竹原市議会議長の道法知江氏のスピーチには、共感できる部分が多かった。妻として、母として4人の子育てをし、女性軽視の社会を変えたい、身近の困っている母親たちの本当の声を届けたい、誰もが認め合えるような地域社会を構築したいという思いから、政治の世界に飛び込んだという。

彼女の経験から、政治家は目的ではなく手段である。多様化する現代社会の今だからこそ女性の力が必要であるという考えは、同感であった。

今回のフォーラムに参加し各氏の討論を聞きながら、分権改革の進展や、地方創生の進展に取り組むなか、市民の負託と信頼に確実に応えるべく、議会の更なる機能向上に繋がるような取組を研究していくべきと強く感じた。